

田島知郎（編）
千野 修，田島巖吾（編集協力）

ジェネラリストのための外来初療・処置ガイド

小西敏郎

東京医療保健大教授・医療栄養学

評者自身のことで恐縮であるが、つい最近バングラデシュの首都ダッカ滞在中に、ホテルの階段で足を踏み外し転落した。最上段から10段も落下し、激しく右肩を床にぶつけ、肩関節が脱臼となった。元外科医とはいえ、古希を迎えての単身旅行、言葉が不自由な外国、しかも開発途上国であり、夜8時のことである。この話を聞いた友人全員が、さぞや治療に難渋したことであつたらう、と大いに同情してくれた。

だが実際は、駆けつけたホテル従業員がすぐに、私を招いた現地の外科医にスマホで連絡してくれた。彼は、直ちにホテル近くの緊急病院の整形外科医に連絡を取ってから、車で駆けつけて、そのクリニックに私を運んでくれた。整形外科医は苦痛で顔を歪める私に英語で問診しながら、視診・触診しただけで即座に診断し、単純X線、CT/MRIや血液検査をすることなく、無麻酔で整復してくれた。転落してからわずか30分で脱臼は整復され、激痛はたちまち軽減した。

これが日本であつたらどうだつたらう。夜間に迅速に対応する整形外科医が常駐している病院は東京都内でも非常に少ない。昼間でさえ即対応してくれる病院は決して多くないのでは、と思う。これは整形外科だけの問題ではない。似たようなことは、外科でも産婦人科でも、日本の

いたるところで起きている。ご存じないと思うが、わが国に滞出張するある米国の会社役員は「日本で病院を受診しないこと、救急車を呼ばないこと」「韓国に行くか、時間に余裕があれば米国に帰国すること」と指示されているとの噂もある。驚くべきことであるが、きっと痛い目に遭った経験があるからであろう。誠に残念なことである。

わが国の初診外来では、広い範囲にわたる疾患を診療できる医者は極めて少ない。たとえ診断はできても即治療、とまではいかないことが多い。私自身も「アッペを診療できない胃癌の専門医」と友人から皮肉られてきた。

このたび医学書院から、田島知郎先生（東海大学名誉教授）の編集で『ジェネラリストのための外来初療・処置ガイド』が出版された。この本は“もうどんな患者が来ても困らない、日常外来から当直まで、臨床医が行うべき初期対応を一冊にまとめた”本である（表紙帯より）。カラーの写真やきれいなイラストがふんだんの本書を開いてみると、「初療時の心構えと届出義務」「救急医・総合医役も兼ねる外科の初療」「基礎疾患のある患者での初療時の留意点」（第1～3章）に始まり、皮膚・軟部組織領域、頭部・顔面、頸部・頸椎、肩・上肢・手指、胸部、腹部、鼠径部、肛門、泌尿器・産婦

人科領域、下肢・足、さらに乳幼児・小児疾患と、全身全ての部位・領域にわたる多種の疾患が網羅されている。まず初診時に必要とされる疾患の基本概念が紹介され、さらに特徴的な症状と診断のポイントが簡潔にまとめられているので、慣れない疾患でもすぐに正しく診断できる。そして全ての疾患に、緊急に必要な処置がわかりやすく書かれているので、どんな患者にも迅速で適切な初療を行えることは間違いない。

ちなみに「外傷性肩関節脱臼」についてみると、私がダッカで受けた挙上整復法が3コマの挿絵付きでわかりやすく紹介されている。また脱臼修復後のリハビリについても、“早期運動開始による反復性脱臼は若年者に多いが、40歳以上の場合には拘縮を避けるために早期の運動がよい”（p.131）と薦められているので、私は安心して早期のリハビリを開始することができた。

本書を救急診療部門だけでなく、一般診療を行っているクリニックや病院外来などに備えておくことをお薦めする。またNP（nurse practitioner, 診療看護師）を志す看護師の皆さんにとっても必読で、座右の書となるであろう。

●B5/頁312/2016年

定価：本体8,000円＋税

[ISBN978-4-260-02420-4]

医学書院 刊